

新体操ジュニア選手の演技構成に関する一考察

—— 個人競技（こん棒） ——

長 谷 川 洋 子

I. はじめに

新体操個人競技が、1984年第23回オリンピック・ロサンゼルス大会から正式種目になったことにより、日本国内において新体操に対する理解度と普及率がより高まったように思われる。それに伴い低年齢層への普及も高まり、日本のジュニア選手も徐々に育ちつつある。

また、国際的にも1986年10月にオーストラリア（メルボルン）で開催された第5回四大洲選手権大会（Four continent championships）において、初めてジュニアの部（参加資格12～14歳）の競技会が行われた。この競技会で日本代表の石三香織選手が、個人総合でマリー・フージー選手（カナダ）と共に同点優勝したことは、日本のジュニア選手達にとって大きな希望につながったことであろう。ヨーロッパでは1987年5月に第1回目のジュニア競技会が開催される予定である。

このように、ジュニア選手の活躍する場が多くなってきた中で、日本のジュニア選手が国際大会で少しでも上位に進出するための要因、ひいては日本の新体操発展のための要因を探るべく、本研究にとり組んだ次第である。

II. 研究目的

1986年第2回ワールドカップが日本（東京・国立代々木第一体育館）において開催されたが、その中で特に目についたのは、15～16歳の若手選手の活躍であった。丁度オリンピックの中間の年であるため、各国とも若手選手の育成、強化に努めているためでもあろう。

日本においても毎年、全日本ジュニア選手権大会（1986年の参加資格11～16歳）が開催されているが、その上位選手とワールドカップ出場の若手選手との間には、技術面その他において大きな隔りがある。

そこで、ワールドカップ出場の上位若手選手と、第4回全日本ジュニア選手権大会における上位選手の演技構成を分析、比較し、望ましい演技構成法について検討、考察しようとするものである。

今回は特に、日本選手にとって苦手種目だとされている“こん棒（CLUBS）”について研究してみた。

Ⅲ. 研 究 方 法

第2回ワールドカップ東京大会と、第4回全日本ジュニア選手権大会で実施された演技を収録したビデオフィルムにより、次の点について分析した。

1. 分析対象選手

ワールドカップ個人総合で6位以内に入賞した16歳以下の外国選手3名、および第4回全日本選手権大会で個人総合1、2位の選手と同大会の種目別こん棒で優勝した選手、計6名の選手を分析対象とする。

- タチアナ・ドルチニーナ (ソ連) ワールドカップ 個人総合2位 16歳
- ビアンカ・パノバ (ブルガリア) " " 4位 15歳
- マリーナ・ロバチ (ソ連) " " 5位 16歳
- 藤野 朱 美 (日本) 全日本ジュニア 個人総合1位 15歳
- 石 三 香 織 (") " " 2位 13歳
- 沖 本 富美代 (") " " 4位・こん棒1位 15歳

2. 徒手の要素別難度数、および演技時間の計測

3. 演技面 (12m×12m) での移動方向を $\frac{1}{300}$ に縮小し、演技開始地点⑤から終了地点⑥までを図示した。

4. 各選手が実施した高級難度を (3) の移動図上に、徒手の要素別の記号で明示した。

- S — 歩きまたはかけ足での移動 (Step) T — 回転 (Turn)
- C — 振り, 回旋 (Circle) P — ピヴォット (Pivot)
- J — ジャンプ (Jump) F — 柔軟 (Flex)
- B — バランス (Balance)

5. こん棒の諸要素別操作方法について分析した。

表 1 競技会成績と各選手の年齢 (年齢は1986年4月現在)

大会名	選手名	国名 (県名)	個人総合		種目別 (こん棒)			年齢	
			順位	得点	順位	予選	決勝		Total
第2回 ワールド カップ (1986.10.17~19)	リリア・イグナトバ	ブルガリア	1	39.975	1	10.00	10.00	20.00	20
	ガリーナ・ペログラソフ	ソ連	2	39.700	6	9.975	9.675	19.65	18
	タチアナ・ドルチニーナ	"	"	"	2	9.90	9.95	19.85	16
	ビアンカ・パノバ	ブルガリア	4	39.675	3	9.80	10.00	19.80	15
	マリーナ・ロバチ	ソ連	5	39.450	8	9.80	9.60	19.40	16
	カン・ユン・ラン	北朝鮮	6	39.325	4	9.825	9.90	19.725	20
第4回 全日本 ジュニア 選手権 (1986.12.23~26)	藤野 朱 美	(京都)	1	37.15	7			9.05	15
	石 三 香 織	(宮崎)	2	36.90	2			9.25	13
	徳 利 佳 代	(鹿児島)	3	36.35	2			9.25	16
	沖 本 富美代	(北海道)	4	36.20	1			9.35	15

IV. 結果と考察

新体操において国際競技会の競技者は、競技会の年の12月31日に14歳に達していなければならない¹⁾。それ以下の年齢の選手を指してジュニア選手というが、日本では普及度等の理由から、11～16歳の選手が全日本ジュニア選手権大会への参加資格を有する。そこで本研究では、11～16歳の選手をジュニア選手として取り扱う。

1. 演技構成要素と難度

個人自由演技の構成に必要な要素は、「各手具に特徴的な要素」と「歩きまたはかけ足での移動、振り、回旋、ジャンプ、回転、ピヴォット、バランス、柔軟の要素」である。また、こん棒の特徴的な要素とは「風車、小円、投げ、振り、回旋、打ち、左右別々の動き」であり、諸要素のそれぞれのグループは平均して取り入れられなければならない。さらに演技の難度のレベルは、徒手の要素と手具の操作の結びつき方で決まり、手具との関連なしに行われた動きは、難度とはみなされない²⁾。なお、徒手の「胴の屈」の要素中“MG”とは片足を軸とし、他方の足を体前方に振り上げながら行う後背屈のことで“MGキック”と呼ばれる新体操特有の高級な技の略である。ルール上必要な難度は、最低8種類（高級2個、中級6個）であるが、

表 2 徒手要素別の難度数

選手名 難度	タチアナ・ドルチニーナ		ビアンカ・パノバ		マリーナ・ロボチ		藤野朱美		石三香織		沖本富美代		
	高級	中級	高級	中級	高級	中級	高級	中級	高級	中級	高級	中級	
各種ステップ		15	(1)	7(6)	(1)	16(14)		9		13(12)		10	
振り・回旋		1			(1)	1(0)		4		2(1)		3	
胴の屈	M G	3		1		2		2		4		4	
	その他	2	2	(1)	2(1)	1	3	3	2		2(1)	1	4(3)
バランス			(4)	5(1)				1				(1)	1(0)
回転	両足軸			3	3		1	1	1	(1)	3(2)		1
	片足軸			2		(1)	2(1)	1(3)	3(1)	1(0)	3		1
ジャンプ	2(4)	3(1)	1(3)	2(0)	3(6)	5(2)	2(4)	3(1)	2	2(1)		4	
準アクロバット	1		2		3		0		3		3		
徒手の難度数	7	21	7	19	6	28	8	24	7	25	5	24	
	28		26		34		32		32		29		
手具操作に伴う難度数	9	19	15	11	12	21	12	20	7	20	6	22	
	28		26		33		32		27		28		
演技時間	1'18"		1'27"		1'27"		1'18"		1'22"		1'29"		

※ () 内は手具操作を伴った場合の難度評価による難度数

移動図と高級難度の実施位置

図1 タチアナ・ドルチニーナ

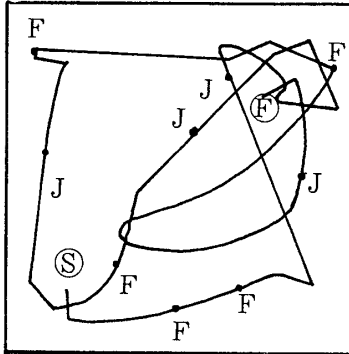


図2 ビアンカ・パノバ

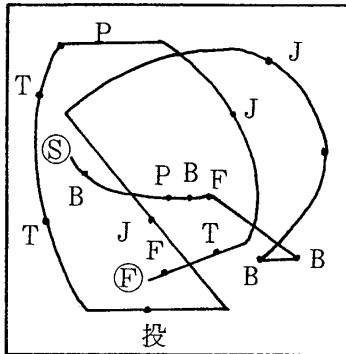


図3 マリーナ・ロバチ

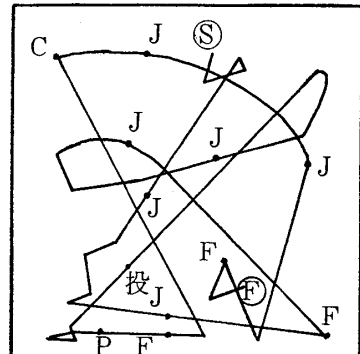


図4 藤野 朱美

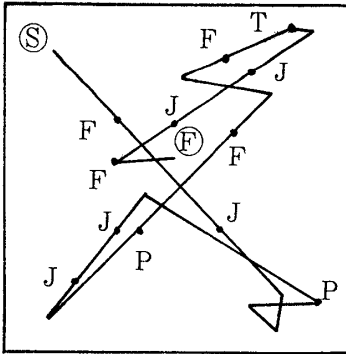


図5 石三 香織

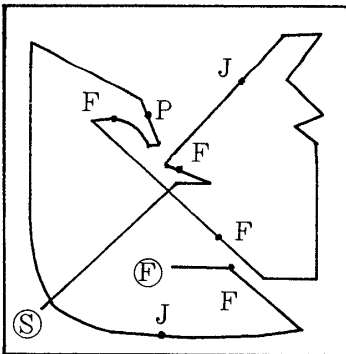


図6 沖本富美代

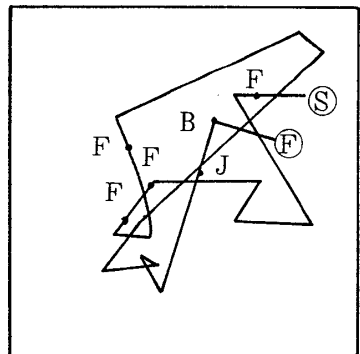


表3 こん棒の諸要素別の操作法

選手名		タチアナ・ドルチニーナ	ビアンカ・パノバ	マリーナ・ロバチ	藤野 朱美	石三 香織	沖本富美代
手具操作							
風車	体前垂直		1	1	3	1	
	体前水平	3	1	3	1	1	
	頭上	2	2			2	2
小円	両手	2	1	1	2	7	
	片手	1	4	1	2		
投げ	1本投げ	7	6	4	5	8	10
	2本同時	4	4	13	6	5	6
	2本時差	5	3	4	3	0	2
振り・回旋		9	10	8	10	8	9
打ち		3		1	1	3	3
左右別々の動き					1		
ころがし		1		1	1	2	1
総計		37	32	36	34	39	33

今回分析した6名の選手はこの難度数を大幅に上まわり、多い選手では33個にもなっている。しかし徒手の要素(表2)から見ると、ドルチニーナ選手には回転とバランスが全く含まれていない。この構成の偏りがワールドカップにおいて10点をとれない原因の一つであろう。パノバ選手とロバチ選手は一応の要素を含み、なおかつパノバ選手はバランス、回転の高級難度を、ロバチ選手はジャンプの高級難度を目立って多く含んでいる。これは演技構成上で各選手の特徴を強調し、他の選手に真似のできない技にまで高めることで、個性と独創性あふれる構成にしているためであろう。日本の3選手も各要素を平均的に含んではいるが、目立った特徴はみ

表4 投げの種類

投げの方法			選手名						
			ドルチ ニーナ	パノバ	ロバチ	藤野	石三	沖本	
一本 投げ	小	体前 垂直	5	1	1	2	4	5	
		体前2本持ち			2			2	
		脚下			1				
	大	体前	1	2		3	3	3	
		水 平		2					
	その他		1	1					
	計		7	6	4	5	8	10	
二本 同時 投げ	小	体前 垂直				1	2	3	
		" 2回転・1回転	1		3	1	1	1	
		" 左右逆回転	1	1	1	1	1		
	小・大	" 垂直	1	1	1				
		" 垂直・水平				1			
	大	体前・背面 垂直			1				
		体前 片手2本・垂直	1	1	3	2	1	2	
		" " 水平			2				
		" 垂直・水平		1	1				
	その他				1				
計		4	4	13	6	5	6		
二本 時差 投げ	小	体前 垂直	1						
		体前・脚下	1						
	小・大	体前	1	1	2	1			
		体前・背面	1			1			
	大	体前 垂直・水平		1					
		" 垂直	1	1	1	1		1	
	その他				1			1	
計		5	3	4	3	0	2		
総 数			16	13	21	14	13	18	
投げの種類			12	11	14	10	6	8	

られない。

次に移動図(図I)では、ドルチニーナ、パノバ、ロバチ選手が全面を有効に使用しているのが見られる。パノバ選手の動線の少なさは、スローテンポの伴奏音楽にあわせゆっくりした動きで構成しているためであろう。藤野選手はフロアの四隅と中央部分は使用しているが、直線的な移動が多く、大きく広がりのある移動が足りないように思われる。沖本選手は著しく偏りのある移動になっているが、これは構成上のミスではなく実施上のミス(前方に投げるべきこん棒を真上に投げてしまったため、本来の移動ができなかった。)によるものである。石三選手は一応フロア全面を使用した構成になっているが、大きく移動する動きは、後半に行く長い距離の走りからジャンプ4回の連続へとつながる1ヶ所のみで、その他は同じ場所にいる時間が長いと動線が少なくなっている。

2. こん棒の操作の多様性

こん棒の操作法では日本選手も外国選手に劣らず、各要素を盛り込んでいるが、全体的に「左右別々の動き」が少ない。その点において藤野選手は、演技構成にすべての要素が入っており、よく研究されている。沖本選手の構成には投げが多く含まれてはいるが、小円は全く含まれておらず、風車も1種類しかない。小円、風車とも、2ヶ所以上での実施がこん棒の必須条件であるため、この構成は望ましくない。ロバチ選手は6名の選手の中で一番投げの数が多く、しかもその他の必要な要素も満たしているため、投げの多さはロバチ選手の演技の特徴といえるであろう。(表3)

こん棒の諸要素においては大きな差はみられなかったが、多様性についてはどうであろうか。そこで、各選手とも一番多く実施している要素の「投げ」について分析してみた。投げの数は日本、外国選手ともあまり差はないが、方法においては外国選手は日本選手の約1.5倍の種類

表5 受けの種類

投げ	選手名		ドルチ ニーナ	パノバ	ロバチ	藤野	石三	沖本
	受けの方法							
一 本	体前	片手1本	4	4	4	4	8	5
	"	片手2本	1					3
	背面	片手1本		1		1		2
	反り身	"	2					1
	計		7	5	4	5	8	11
二 本	体前	両手	7	5	7	8	5	7
	"	片手2本		1	3			
	体前・背面	両手	2	1	4	1		
	反り身	"			1			
	その他			1	2			
計		9	8	17	9	5	7	
総数			16	13	21	14	13	18
受けの種類			5	6	7	4	2	5

を含み、日本選手の投げ方の難度はより安易なものに片寄っている。(表4)また受け方の種類では、外国選手は日本選手の約1.5～2.5倍を含んでいる。「2本投げ」を受ける場合、日本の選手ではほとんどが体前方で受けとっている。(表5)

以上のことからこん棒の投げの要素において、日本選手の構成は多様性に欠けているといえるであろう。このことは、こん棒の他の要素においても同様のことがいえる。

V. ま と め

今回分析した日本のジュニア選手は、3名とも日本国内において新体操競技に必要な基礎能力(柔軟性、跳躍力)とアピール性の高い将来有望な選手である。また、演技構成法でも、諸要素の取り入れ方においては、外国選手と大差はなかった。しかし、こん棒の操作一つをとっても外国選手に比べ、多様性に欠けることが証明された。これは日本選手のこん棒操作が未熟であるため、簡単に実施できる操作だけで構成しており、独創的で変化性のある操作に発展できないことも理由の一つであろう。徒手の要素の取り入れ方においても、平均的でありすぎるために演技全体が平凡に見え、選手の個性が弱く感じられる。

本研究においては、演技構成法について分析してきたが、構成を高めるためには選手の実施能力が複雑に関係してくる。そこで理想的な種目構成にするためには、すべての徒手の要素を完璧に実施できる体づくりと、手具を自由自在に操作できる熟練性に加え、得意技を他の選手が真似できないものにまで高めていく能力が必要不可欠となる。それらの能力が身につくまで、独創的で個性あふれる構成が生まれ、完璧な実施による余裕が表現にまで発展していくのではないだろうか。審判員の心を動かし、感動させる演技になって初めて高い評価が得られるのである。

藤野、石三、沖本の3選手とも日本国内においては基礎能力の高い選手ではあるが、ドルチーナ、パノバ、ロバチ選手に比べると、柔軟性でも跳躍力においてもまだまだ劣っている。しかし、日本のジュニア選手はやっと一步を踏み出したところである。国際競技会の上位選手に刺激され、むやみに物真似に走るのではなく、着実に基礎能力の養成と手具操作の熟練に努め、それと平行して一流選手に接することでよい刺激を受け成長していくことが、上位進出への早道ではないであろうか。

今回はこん棒の研究のみに終わったが、今後も他の手具も含めさらに深く研究を進めていきたい。

引 用 文 献

- 1) F.I.G.「新体操総則」新体操技術委員会 1982年 (注 F.I.G. — 国際体操連盟)
- 2) 日本体操協会「新体操女子規則」 1984年